

被葬者が身につけたアクセサリー



国分山遺跡1号墓から出土したガラス小玉と管玉



木棺墓2から出土した勾玉と管玉

国分山遺跡は、鷹合川と御祓川に挟まれた標高約32mを測る丘陵上に立地しています。

調査の結果、弥生時代後期後半～終末期にかけて築かれた4基の方形周溝墓や複数の木棺墓などを検出しました。方形周溝墓は人を埋葬した穴（墓壇）の周りに溝（周溝）を掘って四角く区画するお墓です。最も大きい1号墓の墓壇からは、被葬者が身につけたガラス小玉約60点と石製の管玉2点が出土しました。また、1号墓の周辺では8基の木棺墓が見つかり、その中の木棺墓2からは勾玉3点と管玉20点が出土しました。

ガラス製品は弥生時代の日本では製作されておらず、大陸から半島を通じて日本へ運ばれたと考えられています。1号墓出土の管玉は鉄石英と呼ばれる赤い石材で、佐渡島産と推測されます。県内ではガラス玉などの出土事例が少ないことから、当時の交易圏の広さを表すものとして、貴重な発見となりました。



R7 発掘調査

こくぶ やま なな お し
国分山遺跡 [七尾市]

今回の発掘調査は、一般国道 470 号 能越自動車道 田鶴浜七尾道路の工事に先立ち行われたものです。

調査区の北側では、弥生時代後期後半～終末期にかけて築かれた 3 基の方形周溝墓や複数の木棺墓、1 棟の竪穴建物などを検出しました。方形周溝墓の周溝は四隅が切れた形で、1 号墓は周溝内側で約 13.0×13.0m、2 号墓は約 6.4m×6.4m、3 号墓は約 5.8×5.0m の規模を測ります。方形の竪穴建物は 2 号墓の西側に隣接し、規模は約 6.5 m 四方を測ります。4 本の支柱を持ち、その真ん中には煮炊きなどを行った炉跡、南側には深さ約 80cm の貯蔵穴がありました。出土した土器の特徴から、弥生時代後期から終末期にかけて利用されたと考えられます。お墓を築いた時期と近い時期に隣接して建物を建てる事例は少なく、1 基のみ単独で確認されたことから、亡くなった人を一定期間安置する^{もがりや}殯屋や何らかの特別な施設であった可能性も考えられます。

調査区の南側では、さらに方形周溝墓（4 号墓：約 6.5m×6.2m）1 基の他、掘立柱建物や時期不明の炭窯とみられる複数の土坑、多数の小穴などが見つかりました。4 号墓は調査区南端に位置しており、次年度以降の調査区へ墓域が広がることが予想されます。

周辺の丘陵上にある^{ほそぐちげん だ やま}細口源田山遺跡や^{こくぶ あまづか}国分尼塚古墳群では弥生時代から古墳時代の墓が築かれており、一帯が広く墓域となっていることが分かっています。今回の調査では国分山遺跡も同様に墓域であったことが判明しました。



遺跡遠景（南から）



1 号墓周辺の発掘作業の様子（南から）



弥生時代後期～終末期の竪穴建物（西から）



埋葬施設から出土した玉類



竪穴建物から出土した弥生土器

R7 発掘調査

すえ まつ の の いち し
末松遺跡 [野々市市]

末松遺跡は、野々市市の南西部、手取川扇状地の扇中央部に位置しています。調査地の西側約700mには、飛鳥時代に創建された北陸最古級の寺院である国史跡末松廃寺跡があり、その周辺では同時期の遺跡が多く確認されています。

本遺跡は、石川県立大学や国道157号等の開発に伴い、昭和60年代以降多くの調査が行われ、飛鳥時代の集落跡のほか、縄文時代から中世の遺構や遺物が確認されてきました。

今年度の調査は、石川県立大学体育館建設に先立ち行われたもので、飛鳥時代から平安時代の建物跡や道路状遺構などが見つかった平成14・15・19年度の調査区と隣接しています。調査対象範囲を、西側のA区と東側のB区に分けて発掘調査を実施しました。その結果、A区は土地造成によって大幅な削平を受けていましたが、B区では縄文時代、奈良・平安時代の柱穴や溝などの多くの遺構を確認できました。また、B区では掘立柱建物の柱列を構成する可能性がある小穴も多数確認しています。遺物は少量ですが、縄文土器や土師器、須恵器、陶磁器片などの土器に加え、打製石斧などの石製品が出土しています。出土した須恵器の一部は、末松廃寺の創建と同時期である、7世紀のものと考えられます。

今年度の発掘調査では、縄文時代、奈良・平安時代の遺構や遺物が見つかったことに加え、末松廃寺創建と同時期の遺物が出土したことにより、廃寺周辺の人間活動の広がりがより一層明らかになりました。



調査区と遺跡の遠景（東から）



B区の遺構（南東から）



遺物出土状況（7世紀の須恵器の坏）



出土遺物

R7 発掘調査

なかの ごう 中ノ江遺跡 [こまつ し 小松市・の み し 能美市]

中ノ江遺跡は、^{かけはし}梯川の支流である^{はっちょう}八丁川右岸の沖積平野に立地する、弥生時代～中世の遺跡です。平成 28 年度と令和 2 年度に北陸新幹線敦賀延伸に伴う発掘調査が行われ、弥生時代後期～古墳時代と中世の集落が確認されています。令和 6 年度からは一般県道粟生小松線の改築事業に伴う発掘調査が開始され、今回の調査は第 2 次調査にあたります。

今年度の調査では、昨年度の調査に引き続き^{ほったて}掘立柱建物や^{へい ち し きたて もの}平地式建物といった建物跡が検出され、弥生時代後期～古墳時代の集落が広がっていることを確認しました。これら建物の柱穴には柱根のほかに、柱の沈下を防ぐための^{そばん}礎板が残っていました。軟弱な地盤でも柱が沈まないようにする、当時の人々の知恵と工夫がうかがわれます。平地式建物の周りには溝（周溝）が巡らされており、周溝の配置や柱穴から建物を建て替えていると考えられます。また、周溝内からは、弥生時代後期～終末期頃の土器が出土しました。このほかに、古墳時代中期の素掘りの井戸も確認しました。井戸の深さは 60cm で、内部からは廃棄された土器や木製品などが多く出土しています。井戸の底からは、調査中も水が湧き続いていたことから、当時の人々も豊富な水を得て生活していたことがうかがわれます。

昨年度の調査に引き続いて今回の調査でも、低地に立地する弥生時代後期～古墳時代の集落の様相が明らかとなり、当時の人々の暮らしの一端が垣間みられました。



調査地遠景（北西から）



周溝を持つ平地式建物（北から）



柱穴に残る柱根（南から）



井戸に廃棄された土器・木製品（古墳時代中期）



周溝から出土した弥生土器（弥生時代後期）

R7 古代体験

真冬の人物はにわづくり

来館者の少ない冬季の期間限定講座として、令和6年度から実施している「真冬の人物はにわづくり」。昨年度は平日限定開催でしたが、今年度は令和8年1月19日(月)～1月25日(日)の週末を含む日程で計画し、平日も含め39人の参加申し込みがありました。

この講座は、古墳時代の文化を知るため、重要文化財矢田野エジリ古墳出土埴輪(小松市)の製作技法を参考にして人物はにわを製作するもので、毎年恒例の夏休み「人物はにわづくり」とほぼ同じ内容となっています。ただ、夏休みは半日講座ですが、今回の体験は1日かけてのはにわ製作となっており、できるだけ出土品に近い本物志向の作品を目指しました。結果は…、全体のバランスや表情、細部の造形に苦戦しつつも、それぞれ個性的で素敵な「はにわ」に仕上がっていました。

「真冬」とタイトルにつけてしまったせい?で最終日の日曜日は記録的な大雪となり講座が中止となっていました。令和8年度は時期をずらして「真冬」のタイトルも外して開催する予定です。



仲良く製作



思わず笑みが



棚に並ぶ素敵な「はにわ」

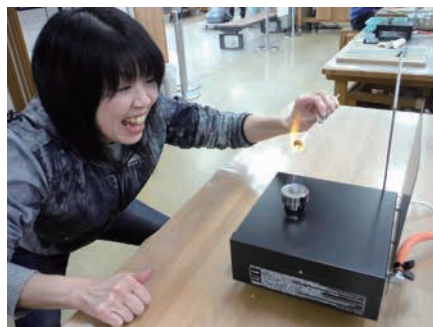
R7 古代体験

冬のガラス玉づくり

冬のガラス玉づくりは2月2日(月)から2月6日(金)の期間限定、事前申し込み制で行いました。たいへん人気のため、抽選で52名の参加となりました。古代のガラスの歴史についての簡単な解説の後、溶かしたガラス棒を鉄の芯棒に巻き付けて形を整える、古代にも用いられたとされる「巻き付け技法」を体験しました。バーナーで熱したガラスを思い通りに扱うのはとても難しく、形が整わなかったり、気泡がたくさん入ってしまったたり、温度変化に弱いので徐冷作業のタイミングを間違えて、芯棒から外すときに割れてしまうなどの失敗もありましたが、それぞれの選んだ色のガラス玉を作り上げ、随時体験の組みひもと合わせて作品を仕上げていました。十分な道具がない時代には、どのようにして製作していたのか、古代に思いをはせる良い機会となりました。



ガラス棒を溶かす



火の中で丸く整形する



できあがった作品

R7 情報発信

令和7年度第2回ホール展『食べること 生きること』

「食べること 生きること」と題し、令和7年12月12日(金)からホール展を開催しています。人間にとって生きるためには、日々食べることが必要です。縄文時代や弥生時代の人々は何を食べていたのか、どうやってそれを得ていたのか、どう調理したのか、それは当時の人々にとって生きることそのものでした。近年の考古学研究や発掘調査でわかってきた生活の一端を紹介する展示です。

森の恵みのコーナーでは、森の動物や植物の利用方法を紹介し、使用する道具を縄文時代と弥生時代で比べられるようにしました。また佐賀県の東名遺跡から、植物で編んだカゴに木の実を入れて穴に設置し、アク抜きや保存を行った痕跡が見つかったことなどを紹介しました。

海の恵みのコーナーでは、縄文時代から弥生時代を通じて盛んな漁撈活動について、様々な方法で魚や貝を利用していたことを示しました。漁具の一部は森で獲れる動物の骨や角から作られる他、どこにでもありそうな石や森で得る木材が素材となっており、人が自然の恵みを活用していたことがわかります。

植物を育てる・活用するのコーナーでは、縄文人たちがクリやマメを栽培していたこと、中国大陸から渡ってきたヤブツルアズキが縄文人によって栽培種のアズキに品種改良されたことなどを、遺伝子のゲノム解析やレプリカ法での成果から紹介しています。米作りを始める以前から、植物をいろいろな形で活用していた人々の知恵には学ぶところが大きいと感じます。



ホール展の様子



森の恵みコーナー



海の恵みコーナー



植物を育てる・活用するコーナー

R7 資料管理

資料の貸し出しと特別利用

石川県埋蔵文化財センターには、県教育委員会が過去 50 年以上にわたって実施してきた発掘調査によって得られた出土品や写真などの記録資料のほとんどが保管されています。それらはデータベースを使って管理され、温湿度管理が必要な資料などは適切な保存環境で保管されています。

その全てが先人の営みの証であり、貴重な文化財であることは間違いないのですが、その膨大な量に比べ、それらを公開する機会は乏しく、当センター展示室や年に数回のホール展等でごく一部を紹介しているにすぎません。

そうした中で、年に数回、出土品を貸し出すことがあります。令和 7 年度は 12 か所の博物館等に貸し出しをしました。県内の施設が多いのですが、県外にも石川の出土品が貸し出されています。福井県や鳥取県、愛知県に貸し出され、来年度は青森県や福岡県と予定されています。特に県外へ貸し出される時は石川の代表といった感じで出土品も誇らしげに旅立っていきます。

もう一つ、資料調査のために出土品を実見したいといった要望や、出土品や発掘調査時の写真を利用したいといった要望もあります。どちらも保管資料の特別利用という埋文センター管理規則に則った手続きを取ることで対応しています。こちらは令和 7 年度で 60 件以上の利用があり、資料の点数だけでいうと 3,000 点以上になります。

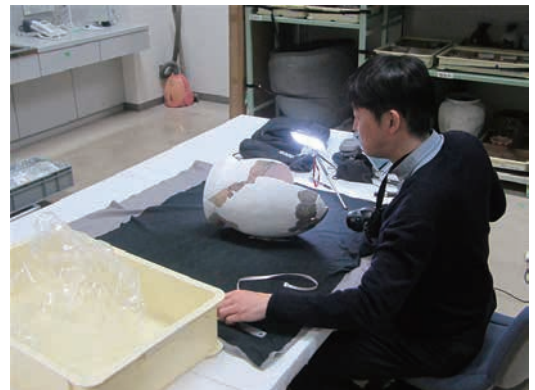
資料調査は、主に大学や発掘調査機関の考古学研究者が石川の出土品を調査に来るわけですが、全国的な視野で石川の出土品を評価していただける貴重な機会と捉えています。そしてその研究成果が公表されることは実物の公開に等しい機会だともいえます。

写真の貸出で圧倒的にリクエストが多いのが旧鹿西町杉谷チャノバタケ遺跡出土の「チマキ状炭化米塊」です。令和 7 年度の特別利用 60 件中 11 件の利用があり、十数年ナンバーワンの座についています。ただ、問い合わせの第一声は「日本最古のおにぎりの写真」で、厳密にはおにぎりではなくチマキなのですが、発掘以来 38 年経った今もお米を加工したものとしては日本最古の出土品です。特に 6 月 18 日の「おにぎりの日」の直前に TV 局から問い合わせがあることが多く、ご覧になったことがある方も多いのではないのでしょうか。

資料の貸し出しも特別利用もその準備が必要です。データベース管理しているとはいえ、実際に寒い（夏は酷暑の）収蔵庫で実物を確認し、収集するのは時間と手間がかかります。それでも、貴重な石川県の文化財が目の目を見えると思うと、充実感が溢れます。



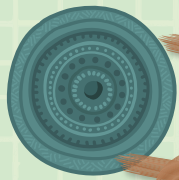
専門業者による貸し出し時の梱包作業



資料調査の様子



人気No. 1 のチマキ状炭化米塊



まいぶん日誌

令和7年
(2025)

令和8年
(2026)

11月～2月



11月

サトイモ収穫体験



出張！埋蔵文化財センター「かごづくり」



出張！埋蔵文化財センター「かごづくり」



第3回まいぶん考古学講座



雪吊り設置（中庭）



12月

講座「鳥形はにわづくり」



樹木剪定作業（緑地）



1月

令和8年お正月

「真冬の人物はにわづくり」



駐車場の「雪の山」



2月

「冬のガラス玉づくり」

